

令和2年度厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）  
（分担）研究報告書

児童虐待対応におけるリスクアセスメントのためのデータ収集基盤構築と  
AIを活用したリスク評価に向けた研究に関する研究

研究代表者 高岡 昂太 産業技術総合研究所

研究要旨：自治体の児童相談所がもつ過去の児童相談データを今後大枠でどのように利活用していくか、現場業務改善と人材育成に向けたデータ利活用ループを検討した。

分担研究者：本村陽一  
産業技術総合研究所人工知能研究センター  
首席研究員

A. 研究目的

今後の研究ディレクションとして、現場のニーズと得られたデータ、また技術シーズをいかにつなぐかについてと、データ利活用において、実践としての研究視点に関する検討を行った。

B. 研究方法

これまでの解析結果を基に、今後どのようにデータ利活用を自治体と協働していくかについて検討を行った。

C. 研究結果

データの利活用を考える場合、現場の課題（ニーズ）を現場と研究者がともに考えられることが重要。AI 開発をして終わりではなく、{データの蓄積→データ解析結果を現場にフィードバックし業務改善} というループを今後、絶えず繰り返していくことが必要である（図8）。

D. 考察

児童虐待対応現場において、システムを開発して終わりではなく、データを用いた業務フローを絶えず改善し続ける仕組みが必要である。AIは必要なデータがあれば、現場にとって非常な有用な知見を得られるが、データの量だけでなく、データの質を問えるよう、データ解析結果だけでなく、現場へのデータ解析フィードバックと現場でのデータを参照した業務フローへの改善などの仕組みが必要となってくると考えられた。

E. 結論

AIは、良質なデータと合わせて用いられる必要がある。そのためには、現場の課題（ニーズ）を明らかにし、それを解決するためにデータと技術を用いるというフレームの理解と、それらを回し続けて課題解決としての業務改善と判断の質の向上をスパイラルアップさせていく必要がある。今後は、現場との協働により、現場の課題を解決するAI技術が開発される必要があり、いかにデータを集められるかについて

現場の実務データが収集され続け、それによりAIが精緻化され、業務が改善され続けるループ（エコシステム）の醸成が鍵

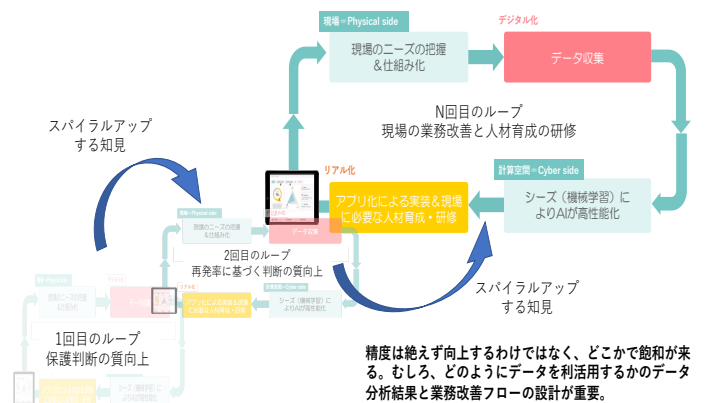


図8：ニーズ・データ・シーズを利用した業務改善のスパイラルアップイメージ

でも全国的にAI導入設計として検討が必要不可欠である。

F. 健康危険情報  
特になし

G. 研究発表

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況  
(予定を含む。)

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし